平成元年(1989年)12月10日　教皇様の声　(昭和59年10月1日第三種郵便物認可)
12 DECEMBER, 1989　毎月10日発行　第116号

教皇様の声

平和の君の誕生

1 「大きな喜びの知らせを告げよう。」(ルカ2・10)

この声が高き所より夜の闇に響き、ベトレヘムの近くで野宿していた羊飼いたちの耳元に届きました。

教会は今宵、この声を世界中の隅ずみへと響かせます。

大きな喜びの知らせを告げよう。

ルカの福音書に記されているその夜のことが、今日の典礼ではイザヤの預言を通して朗読されます。

「闇を歩む民は、大いなる光を見た、闇に包まれた地に住むものに、光が輝いた。」(イザヤ9・1)

福音書はイザヤの書が記すその夜のことをはっきりと確証しました。それが何を意味していたのかを明らかにするとともに、より完全に示したのです。

「新約は旧約の中に隠れ、旧約は新約の中で明らかになる。」聖アウグスチヌスはこのように新約聖書と旧約聖書の関係について述べています。(Quaest. In Hept 2; 37 参照)

ベトレヘムのその夜について語るイザヤの預言はなんと力強いことでしょう!

「闇に包まれた地に住むものに、光が輝いた。」

2 主の天使が羊飼いたちに「大きな喜びの知らせを告げよう」と言った時、彼らは恐怖に襲われ、「大いに恐れた。」(ルカ2・9) そこで天使は急いで続けました。「恐れることはない。すべての人々のための大きな喜びの知らせを告げよう。」(ルカ2・10)

それは「闇に包まれた地に住むもの」「闇を歩む民」のための知らせでした。

夜の闇に響いた天使の声は喜びの宣言でした。

創造の喜びです。神の計画に従って、時が満ちようとするときの喜びです。

そこで預言者イザヤは、羊飼いではなく、刈り入れ人を描写しています。「彼らは御前で喜んだ、刈り入れの時のように、分捕り品を分けて喜ぶように。」(イザヤ9・2)

羊飼いたちもベトレヘムの野原で喜びました。

収穫は成熟を意味し、時の充満を表しています。

3 真に時は熟しました。聖夜の訪れが告げられたとき、イスラエルの歴史、人類の歴史は成熟に達しました。

一人の御方の誕生によって、人類の歴史は神の計画に従って成熟に達しました。

「大きな喜びの知らせを告げよう。今日、ダビドの町で、あなたたちのために救い主が生れたもうた」と福音史家ルカは記しています。(2・10～11)

イザヤは預言していました。「私たちのために一人のみどり子が生れ、子が与えられる……その名は、巧妙な顧問、力ある神、永遠の父、平和の君ととなえられる。」(イザヤ9・5)

何と意味深い呼び名でしょう。

その夜ベトレヘムでお生れになるみどり子の母は、その一つだけをご存じでした。「その子をイエズスと名づけなさい。」(ルカ1・31)

マリアの「許婚」であった大工のヨセフも知っていました。

4 イザヤの書が記す名の何と豊かなことでしょう。お生れになるみどり子、時が満ちてお生れになる御方、ベトレヘムのその夜、「宿屋に部屋がなかったので」(ルカ2・7)町の外でお生れになる御方がいかに偉大な御方であるかを示そうとしたのです。みどり子はお生れになって家畜用の「まぐさ桶」に横たえられました。

それにも拘わらず、イザヤは次のように述べています。

「彼の治めるところは広大、かぎりなき平和のうちに、ダビドの座を。」(イザヤ9・6)

マリアも天使の御告げによってご存じでした。「その子は主なる神によって父ダビドの王座を与えられ、永遠に……治め、その国は終ることがない。」(ルカ1・32～33)

燃える愛

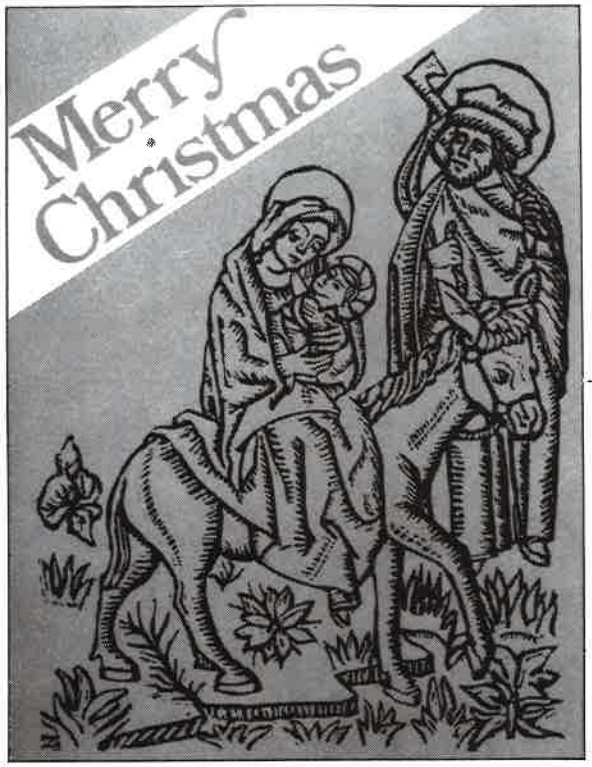
5 すばらしいことです。預言者と福音書の両方をもとにした典礼はまことにすばらしい限りです。

互いに排除するはずの表現が作り出す対比は素晴らしく、それでいて両方の深み、核心において一致しています。神の計画の深みにおいて一つになるのです。

ベトレヘムの夜は光を見出し、羊飼いたちはすでに馬小屋に到着しました。

そこで起った全てのことは預言者の言葉通りでした。

「万軍の主の燃える愛(妬み深い



Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済
©1989

発行所
財団法人■精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6
☎(0797)31-3452

愛）がそれを行う。」（イザヤ9・6）

6 燃える愛（妬み深い愛）とはどのような愛でしょうか。

それは、愛しながらも、自らの限界を乗り越えられない人の愛のことでしょう。

神の愛は燃える愛（妬み深い愛）でしょうか。

ベトレヘムの夜は何を言おうとしているのでしょうか。

神として、「限界を越えた」神を証しているのではないでしょうか。今、布で包まれたみどり子として（家畜用の）まぐさ桶に横たえられている（ルカ2・7参照）御方を証しているのではありませんか。

燃える愛（妬み深い愛）とはどういう意味でしょう。誰が答えてくれるでしょうか。

7 マリアよ、あなたが答えてくださいます。あなたは他の誰よりもよくご存じでした。ベトレヘムのあの夜、御降誕の時、すでにご存じでした。

今ご存じですが、後には完全に理解なさることでしょう。「私たちを罪から贖うために」ご自分を与えられるマリアの子――神――の「燃える愛（妬み深い愛）」が示す真理を完全に理解なさることでしょう。（テイト2・14参照）

燃える愛（妬み深い愛）。イザヤよ、教えてください。それは、最後の最後まで、そしていつまでも自らを与えつくす愛のことではないでしょうか。

今夜この愛が世に来られます。大きな喜びの知らせを告げよう。

（八八・十二・二四）

平和をめざして

二月十日は私の前任者ピオ11世の帰天50周年の記念日でした。教皇は一九二二年から一九三九年まで教会にとってだけではなく、歴史的にも長い期間教皇職にありました。彼は十分な学問の準備をし、ポーランドやバルト海沿岸諸国の教皇使節として、ミラノでは聖アンブロジウスと聖カルロの司教座でフェラーソ枢機卿の後任として司牧的経験を積み、教皇職に登位しました。

彼は最初の回勅で「キリストの王国におけるキリストの平和」（「ウビ・アルカーノ」一九二二・十二・二三）の言葉によって、その教皇職のプログラムを示しました。

沢山のテーマが偉大な諸文書で扱われています。平和のための行動。増大するナショナリズムに直面して彼は国際的仲裁を組織し、軍備競争を止める努力を支援し、奨励しました。宣教活動。種々の人々の中でのキリスト教の受肉とその土地出身の聖職者たちによって教会を築きあげること。この点に関して、一九二六年最初の中国人司祭が六名叙階された事実は特筆に値します。またカトリックの諸々の会組織を激励して、使徒職に信徒を招いて責任を果させること、これによってピオ11世はカトリックアクションの教皇として知られ、暗い時代にカトリックアクションを強力に守ったのです。若者の教育。結婚、仕事、社会生活についてのキリストの考え。無神論的な共産主義を非難するのと併行して、国家社会主義の最初の人種法に対して人間の権利を大胆に宣言し、その常軌を逸したイデオロギーを非難しました。臨終が近づいたとき、彼はヨーロッパの平和のために自らの生命を捧げました。教皇はイタリアを愛しました。イタリアの宗教的善と国民の善を望みました。ですから、後に「ローマ問題」を解決することになるラテラノ条約締結のため骨の折れる折衝を指揮したのです。これらのことは、彼の果したすばらしい仕事の数々です。昨日私たちは彼の業績の60周年記念日を祝いました。もう一つ忘れられないこと、それは一八七六年に中断されたままであったバティカン公会議を再び召喚する希望を表明したことです。

彼はまことに偉大な教皇で、騒乱の世代に深い印象を残しました。あらゆる面で活動のできた人、キリストの王としての尊厳を備えた教皇でした。（…）天国からピオ11世が聖なるローマ教会の世界的発展を助けてくださるよう期待したいと思います。

（一九八九年二月）

マリアと共に御降誕の準備を！

クリスマスを迎える準備をしつつ、待降節第四主日を迎えました。間もなく喜びの内に御降誕を祝います。

今日のミサでは、マリアの親戚であるエリザベトがマリアに贈った賛辞――ああ幸せなこと、主から言われたことの実現を信じた方は（ルカ1・45）――を思い起し、マリアの信仰について黙想します。

クリスマスの典礼で朗読されるルカの福音書に記されたこの出来事は、イエズス・神の御子・永遠のみことばに対する私たちの信仰をさらに強いものとするよう招き、勧めます。神の御子は人類の内に住み、恩寵を与え、真理を示すため、おとめマリアの胎内において人となられました。（ヨハネ1・14、17参照）　エリザベトの言葉はとても印象的で、マリアが神の御旨を伝える天使の御告げに、信仰の従順をもって答え、完全に自らを神に委ね、それにより大いなる祝福を受けられたことを思い起させてくれます。マリアは心も意志も完全に主に捧げました。御告げの瞬間に、選ばれた民の先祖たちへの約束が実現したことを理解し、無条件の寛大さで神の計画の実現に協力する準備をなさいました。

待降節の最後の週にいる今、お生れになる聖なる御方・神の御子を迎える準備をしたマリアのその強い信仰について黙想しましょう。

私たちもマリアと同じ信仰をもって、馬小屋の準備にとりかかりましょう。馬小屋を作る伝統は芸術的・民衆的表現を通して私たちの眼前に再びベトレヘムの秘義を展開してくれます。馬小屋を作って、そこに私たちも霊的に入り込みましょう。馬小屋の中で神のみことばは謙遜に人知れず生れることをお望みになりました。マリアとヨセフ、羊飼いたちと共に、賛美の心で聖夜にお生れになる救い主に近づきましょう。

ローマの子供たちは今日この広場に、美しい伝統に従って、それぞれの家の馬小屋に置くための幼児イエズスの御像を持って来ています。その小さな御像を祝別するのは嬉しいことです。

幼い皆さん、ベトレヘムの羊飼いのように、イエズスの美と善の使者、証人になってください。家族の中で、友達の間で、学校で、使者、証人となってください。

近づくクリスマスがあなたがたの家庭、世界の全ての子供たちの家庭に喜びと平和をもたらすよう祈りましょう。とりわけ、最近壊滅的な災害によって家を失くした子供たちのために祈りましょう。（十二・十八）

説教・講話・書簡等の抄訳

恩寵に満ちた方

「めでたし、聖寵に充ち満てるマリア。」(ルカ1・28参照)

小さな町ナザレトで幸いなおとめマリアは天使の挨拶を受けます。マリアは胸騒ぎがし、「心が乱れ」ますが、よく考えます。この挨拶は何のことであろうかと。(ルカ1・29参照)

今、神はマリアに永遠の秘義を打ち明けられます。御自分は御父であるということ、そしてこの父であること、つまり父性が御子において見事にあらわれるということを明かされるのです。御子は御父と同一(同質)の本性を有し、御自ら神であらせられる御方、神よりの神、光よりの光、まことの神よりのまことの神、造られずして生れる御方です。

そうです。お生れになる御子です。父と子と聖霊、すなわち三位一体の神において永遠よりお生れになる御子なのです。

天使のお告げを通して、小さな町ナザレトの至聖なるおとめのところへ神御自身が来られ、永遠の秘義を明かされます。

神は、創られたもの、つつましいはしためであるマリアと、永遠の御計画の秘義を共にされます。それは愛なる神、父と子と聖霊による計画です。愛なる神は、見えるもの見えないものを含む創られたもの全てを受け入れる御方です。

「昨日も今日も代々に同じ」(ヘブライ13・8)三位一体、その神の存在そのものである愛は、人間に集中されます。何ら代償を要求なさらず、神の生命、本性、神性に与るよう神はお望みなのです。

今、恩寵に充ち満ちたマリアはこの寛大な賜を受けます。創られたものの心と人類の歴史がマリアの内で初めてエンマヌエルの住まいとなります。

「主はあなたとともにおいでになります。」(ルカ1・28)

「あなたは女の中で祝福された方。」(ルカ1・42)

マリアは天使の挨拶を受け、マリアと共に全ての被造物―全人類がこの挨拶を受けたのです。事実、これらの言葉は人間について語っています。

「あなたは身ごもって子を生む。」(ルカ1・31)　人間は女から生れます。女は身ごもり、宿し、誕生させます。おとめのままで、マリアはこれを成し就げなければなりません。母にならなければならないのです。

「私は男を知りませんがどうしてそうなるのですか…。」

「聖霊があなたにくだります。」(ルカ1・34～35)

聖霊。御父と御子と一体であり、造られざる愛である御方。愛そのものである聖霊によって、御父と一体であり、神性において永遠よりお生れになる御方――神の御子――の人間としての誕生の秘義が実現するのです。

マリアは尋ねます、「どうしてそうなるのですか?」

「肉体の意志ではなく、人の意志ではなく」、ただ神によって実現します。「神の御子と言われる聖なる御方」は、(ルカ1・35参照)神によってお生れになります。

「聖霊があなたにくだり、いと高きものの力の影があなたを覆うのです。」愛であるこの力によってのみ、御子はお生れになります。神でありながら人となられ、人でありながら神の御子なのです。

あなたの御子です、マリア。恐れることはありません!

教会は、絶えずナザレトのおとめと共にこの挨拶を受け、考えます。「なんのあいさつだろう。」黙想するうちに、マリアが受けた挨拶に導かれ、可能な限り、神と救いの計画の秘義の言いようのない深みへと入っていきます。

このようにナザレトでの挨拶の言葉を考えていると、言葉を越えて、広い意味での人類の歴史とその始まりに目をとめることになります。だから今日の典礼では創世の書の原罪について語る箇所を朗読するのです。

朗読のあと、思いはまた、天使が恩寵に充ち満ちた方と宣言した御方マリアへと戻ります。

マリアは原罪を免れる必要があったのだろうか? 原罪という遺産を免れていなければならなかったのだろうか? 救い主の母になるべく、はじめから選ばれていたマリアにおいて、罪の贖いが実現されなければならなかったのだろうか? (…)

「汚れなき(無原罪の)御宿り」の名で呼ばれるマリアの秘義に心をとめ、待降節を迎えましょう。典礼年の待降節とともに次の千年の到来も迎えましょう。

クリスマスの夜、そしてキリストが死と生命の間で苦しまれたあの過越の夜に向いましょう。

キリストのうちに、永遠なる御父はナザレトのおとめを選ばれました。

キリストのうちに、神は全ての人を「ご自分の前に聖である者、汚れない者とするために」(エフェソ1・4)選ばれました。それはマリアとともにキリストに希望をおいた私たちが、神の光栄の誉れとなるためだったのです。(エフェソ1・12参照)

罪は創造された世界を醜くする

「罪」シリーズ❶

あがないの秘義と罪

1　三位にして一体、摂理の主・創造主、宇宙の父にして主である神についてのカテケージスの後に、救い主としての神についてのシリーズを始めましょう。

ところで、このカテケージスの基礎として信仰宣言があります。とくに最古といわれる使徒信経や、ニケア・コンスタンチノープル信経を掲げることができるでしょう。これらの信経は有名でよく用いられており、前者はキリスト信者の祈りの中で、後者は典礼文の中で使われているものです。両信経ともに、内容は似通った配列をもち、全能の父、天と地のすべての見えるものと見えないものの創り主である神について語る箇条に始まり、イエズス・キリストについて語る箇条へと続きます。

使徒信経は「我らの主の御独り子イエズス・キリスト、すなわち聖霊によりて宿り、童貞マリアより生れ…」と簡潔に述べ、ニケア・コンスタンチノープル信経は、神の御子キリストの神性を信じる宣言を「よろず世のさきに父より生れ、…造られずして生れ、父と一体なり」と唱えます。つづく一節はみことばの受肉の秘義に移り、「われら人類のため、われらの救いのために天よりくだり、聖霊によりて、おとめマリアより御からだを受け、人となりたまえり」と詳しく述べています。両信経は共にイエズス・キリストの過越の秘義のなりたちを示し、裁きのための再臨を告げ知らせています。

続いて信経は、聖霊を信じること

不変の教え

を宣言します。従って、両信経は本質的に三位一体(御父と御子と聖霊)を中心に展開する構成になっていることを強調しなければなりません。と同時に、両信経ともに、至聖三位一体の神の「外に向う」活動を強調しています。最初に(創造主としての御父による)創造の秘義について、次に(贖い主としての御子による)贖いの秘義、そして(聖化する聖霊による)聖化の秘義について述べています。

創造された全宇宙

2 こうして私たちも信経に従って、創造の秘義――もっと詳しくいえば全てのものの創造主である神について――の一連のカテケージスの後、今度は贖いの秘義、つまり人間と世界の贖い主としての神に関するカテケージスに進もうと思います。そしてこれは、イエズス・キリストについてのカテケージスになるでしょう。なぜなら、贖いの業は(創造の業と同様に)一にして三位なる神に属するものですが、私たちを救うために人間になられた神の御子イエズス・キリストによってもたらされたものだからです。

贖いの秘義に関して、キリスト論が人類学と歴史学の中に見出されることに目をみはらされます。それというのも、御子は御父と同じ神でありながら、聖霊の働きによって人間となり、おとめマリアから生れ、創造された全宇宙の中で、人類の歴史に入ってこられたからです。御子は「われら人類のため」「我らの救いのために」人間になられました。信経では託身の秘義を贖いの一部分としています。従って啓示と教会の信仰とによれば、託身の秘義は救いの(救済論的)意味をもっているのです。

3 というわけで、歴史の舞台における救いをもたらす託身の秘義について述べる時、信経は悪という現実、第一に「罪という悪」について述べることになります。というのは、救いは悪よりの解放だけを意味するのではなく、もっと広義にキリストが人間にもたらされた聖なる生命の豊かさを含むものであるとはいえ、何よりもまず、悪からの解放、とりわけ罪よりの解放を意味しているからです。啓示によれば、罪は主要な根本的な悪です。すでに創造の業の中で、とりわけ創造主の似姿に創られた理性ある自由な存在の創造において啓示されているように、罪は神の御旨を、神の真理と神聖を、父親らしい神の慈愛を拒絶することです。また、被造物の存在と生命のために神の定められた目的を、理性をもつ人間が自由意志で拒絶するということは、まさに神の似姿である人間が、神に逆らうということです。罪は創られた善きものを醜く歪めてしまいます。

4 贖いの秘義はその根元において、人間の罪という現実と結びついています。キリストのうちにキリストによって神が救いを成し就げられたそのイエズス・キリストについて語る信経を説明しようとすれば、当然ながら罪というテーマに直面することになります。罪は、神が創られた世界に広く隠れて存在します。罪は人間の中に、創られたものの中にある全ての悪の根底にあります。このように考えてのみ啓示によってもたらされた神の御子が、「われら人類のため」、そして「われらの救いのために」人間となられたという事実の意味を余すところなく理解できるでしょう。救いの歴史は、神によって創られた人類の歴史における罪の存在を事実上前提としています。そして神の啓示が語る救いとは、何よりもまず第一に、罪という悪から解放することです。われら人類のため、またわれらの救いのために天よりくだった――これが、キリスト教救済論の中心となる真理なのです。あらゆる啓示の中で救いについての真理が中心であることを考えると、言い換えれば、贖いの秘義が中心であることを考えるならば、罪に関する真理もまた、キリスト教信仰の核心にあるということに目を向けねばなりません。「罪」と「贖い」は救いの歴史の中で相関関係にある言葉なのです。従って、信経の中で宣言するイエズス・キリストによってなされた贖いの業についての真理を本当に正しく理解するために、まず最初に罪に関する真理を考察しなければなりません。このカテケージスで何よりもまず罪に関して述べるのは、啓示と信仰の関係から見て、まことに筋の通った順序であるといえるでしょう。

5 第一バティカン公会議では「神は自分が創ったすべてのものを摂理によって保ち治める」と教え、知恵の書から「この世の果てから果てまでその力を及ぼし、すべてのものを巧みに司どる」(知恵8・1参照)と引用しています。(Dz 3003)

この公会議では、その力強い御手と御父の優しさとをもって、御自身が保ち導かれる事物に対する普遍的な神の配慮を認めた上で、神の摂理には理性のある自由な人間が創造の業の中へと導き入れる全てのものが、特別な方法で含まれているとはっきり述べています。すなわち、神の御旨に従うことも逆らうこともできる人間の行為も、摂理のうちにあるということであり、当然ながらそこには罪も含まれていることがわかるでしょう。

このように神の摂理に関する真理のおかげで、罪そのものを正しく考察し理解することができます。摂理を理解して始めて罪の姿がはっきり見えてくるのです。罪に関するカテケージスの冒頭で次の点を述べておきます。信経はこのテーマについて少ししかふれていませんが、この事実こそ罪を、贖いの秘義(救済論)の中で吟味するようにと示唆しているのは明らかです。創造に関する真理、さらには神の摂理に関する真理が、(神の無限の慈しみの啓示のおかげで)的確な言葉を使って明らかに、悪の問題、特に罪の問題を見せてくれるのであれば、贖いの真理を理解することによって、「罪が増したところにはそれ以上に恩寵があふれるばかりのものとなった」(ローマ5・20)と言えるようになるはずです。なぜなら、そうしてこそ正義と慈しみの神における和解の秘義をよりよく理解することができるからです。ところで、神の正義と慈しみは神の善性の二つの面です。

従って罪という現実は、贖いの光の中で、神、つまり愛である神(ヨハネ①4・16)の神秘についての知識を、より一層深める好機になるといえるでしょう。

こうして信仰は、様々な哲学や文学、偉大な宗教との注意深い対話を始めます。これらのものはしばしば悪と罪の根元を話題にし、贖いの光を求めています。このような共通の基盤に立ってこそ、キリスト教信仰は全ての啓示の真理と恩寵を人々の善のためにもたらすことができるのです。

(八六・八・二七)

「教皇様の声」
年間購読者募集中！

日曜日ごとの「お告げの祈り」の時や水曜日ごとの一般謁見の時を始め、教皇様はあらゆる機会をとらえて教えを伝えておられます。本紙は、ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま、わかり易い日本語に訳して伝える月刊紙です。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

《年間購読お申込要領》

●1,500円(年間購読料900円＋送料600円)を郵便振替にてお送りください。

●教会で2部以上まとめてお申込みになると送料が無料です。教会名・ご担当者名・部数を明記の上、お申込みください。

見本紙は41円切手同封で、ご請求下さい。

財団法人■精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6 ☎0797-31-3452

『教皇様の声』 ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 ■毎月 十日発行 ■定価 一部八十円 送料実費 ■一年予約九〇〇円 送料六〇〇円 ■二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替 神戸 3-72393